

しろひげ@Kurobane です。

7月になりました。

降る音や耳も酸(す)うなる梅の雨 芭蕉

疎ましい梅雨も、「夏の水瓶」を満たす大事な役割を担うものと思い直して、我慢もしてきた日本人ですが、ここ数年の度し難い天の異常に辟易させられています。

農作物や水道水のためにも、昔ながらに、月並みに災いのない程度の仕事をしてほしいと願う気持ちを嘲笑うように、列島に絡む前線は凶暴な竜にすら見える昨今です。

よく降りますねえ、の挨拶が例年に増して多くなっている水の季節です。

とはいえ、温暖化の罪を呪ってばかりでなく、青い傘マークの合間には外の湿気に身をおき、つかの間の解放感に浸りましょう。

瑠璃色の水を湛えた湖のようだと、だれかが表現した梅雨の晴れ間の空の色を楽しむことができるはずです。

そして、道端や庭先には、雨滴を涙のように揺りこぼし、ほのかな憂いを含むアジサイが穏やかな気持ちにしてくれます。

手まりのたとえそのままに、どれもよく膨らむアジサイは、どんな空模様でも、青く白く、あるいは紫に映え、日々の情緒とコンタクトしあう花であることを実感します。

幕末、来日したオランダの医師シーボルトは、長崎のアジサイをこよなく愛したとか、雨の長崎は格別の美しさであったに違いありません。

それぞれに「おらが地のアジサイ」を楽しみながら、夏の本番をまつことにしましょう。

<迷うあじさい七色変わる、色が定まりや花が散る>

あじさいこそは、人生のような花でもあり、七変化の妙を見せながら、私たちに梅雨が明ける日が近いことを告げる使者なのでしょう。

あじさいの属名はハイランシア、「水の器」の意とか、皆さんの7月の器からこぼれたお話しなどがありましたら、お便りを下さい。